
IS 夢の果ての殺人貴

油ドン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 夢の果ての殺人貴

【Nコード】

N5671U

【作者名】

油ドン

【あらすじ】

誤って投稿したプロローグを組み込みました。

連載再開しました。

プロローグ1（前書き）

指摘がありましたのでプロローグ1を統合します。読みづらいでしようが、配慮にいれて読んでいただくことをお願いいたします。

プロローグ1

とある城を守る死神がいました。

彼は幾度も幾度も魔王と呼ばれた彼女の敵を排除してきました。

しかし、守ろうとした最愛の彼女が暴走し、それを抑えるために彼女を彼は殺しました。

彼は涙しながら、彼女の名前を呼び、泣き叫びました。

しかし、彼女はやさしい声で「ありがとう、志貴……」と叫びました。

志貴と呼ばれる青年は泣き叫び彼女が死ぬまで隣にいました。

「アルクエイド……俺は……もう……」

そして青年も彼女の遺体を誰にも見つからないように隠し自らも姿を消しました……。

そして、世界は震撼した。魔王とその守護の死神が姿を消した、という事実……。

これはその死神呼ばれた青年、志貴が時を越える物語である……。

プロローグ1（後書き）

プロローグ1です、今まで放置しててすみませんでした（；^ ^）

テストも終わったのでこれから書いていこうと思いますのでよろしくお願ひします。

ぶっちゃけ、うた プリにハマってしまったので保障できませんが
・・・w

プロローグ2（改）（前書き）

プロローグ2です。

文章を書く上でこうしたほうがいいよって方はどんどん、アドバイスをお願いします。

すっげえよろこんで次につながりますので！！w

感想を元に修正いれてみました。

どうでしょうか？

プロローグ2（改）

アルクエイド
彼女の遺体を隠した後、志貴は城を出る前に最後の別れのように彼女がいた空間を眺めました。

「アルクエイド……、さようなら……。」

そうして出口へと振り返ろうとした時……、謎の光が突如、志貴の目の前に現れた。

「なんだ……、この光……？」

志貴は疑問に思いながらも警戒しつつ光を観察しました。すると、突然光が志貴を覆うように迫ってきた。

「っな……、冗談じゃない!!」

志貴はそう言い、すぐさまバックステップで後ろへ回避しようとしたが、

「この光……、速度が速い……!!」

志貴は光に飲まれそうになり、「眼」の包帯をとり、「くっ……!!—か八かだ!!」

包帯を取った志貴の眼はとて深く蒼い眼でした。

「線がないっ……!!、なら、点はどこだ……!!」

そう志貴は叫び、集中して光の「点」を探し出そうとしました。

光に飲まれないように、柱などを蹴りながら移動し、「点」に意識を集中させた結果、

「……っ、見えた!……っな!!」

志貴がそう叫んだ瞬間には光は志貴を覆いつくす寸前だった。「なら、これで……!!」

志貴は懐から一振りのナイフをだし、

「点を……突く……!!」

腕を伸ばし、点を突くことに成功したが、

「なっ……!消えない……!!」

光は変化なく志貴を覆いつくし、

「こんな・・・ところ・・・ろ・・・で・・・っ！」
志貴は薄れいく意識の中叫び、意識を失った・・・。

プロローグ2(改)(後書き)

よし、次もがんばる！

修正後の感想も受け付けてます！

世界を超え・・・(前編)(前書き)

書いてて思った。今回は特に説明回すぎるって・・・w
しかも、書いてるときに寝て深夜になっただしw完成したのがwwww
まあ、見てくださるとうれいすw

世界を超え……（前編）

世界はに篠ノ之^{しののたはね} 束よつて発明された「I・S」によつて激変した。「I・S」とは通称「インフィニット・ストラトス」といい、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツである。しかし、世界はこの「I・S」を認めなかった。だが、「白騎士事件」をきっかけに世界は「I・S」を受け入れた。しかし、製作者である束が突如、姿を晦ました。束が姿を晦ましたことにより、世界には467個のコアが残った。各国はこれを分配し抑止力として使った。各国からは国家代表候補生や代表候補生などが専用ISを与えられるため特別視されていた。そして、某A国が「日本が起こした事態なんだから、自分の国で責任とつて技術や育成所をつくれや、あ、金は自国でだしてね」と、ヤクザばりの要求をした。そして、できたのが「I・S学園」である。「I・S学園」とは、各国から集まった代表候補生やI・S操縦者を育成する学校である。そして、教員もまた、元候補生などで構成されていたりする。織斑千冬もその教員の1人であった。「山田君、入学式も含めて後1ヶ月ちよつとを切つたが、資料や授業の準備などはどうだ?」
と千冬に呼ばれた山田先生は
「はい、資料などは問題ありません。」
と答えた。
「わかつた、では、職員会議も一段落したし、休憩にしようか」と千冬が言つと、
「はい、織斑先生はコーヒーでよろしいですか?」
と答える山田先生。

「頼む」と一言言う千冬だった。

「しかし、あのバカはやつてくれたな……。」

「弟さんのことですか？」

「ああ、どこのバカが「藍越」と「I・S」を間違えてしかも「I・S」を起動させるやつがいる？」

とため息を漏らしながら千冬がいうと、

「あはは……。」

と言いながら苦笑いした山田先生だった。

2人で雑談しながら休憩していたが、

突然、中庭の方で光が発生し消えたので、

「お、織斑先生……！」

「山田先生……、いくぞ。」

と2人は至急中庭に向かった。

「っ……ぐっ!？」

志貴はふと、目を覚ました。

「ここ……は、どこ……だ？」

まだ、はつきりしない頭で回りに確認を行おうとすると、

「ここら辺に光が落ちませんでした？」

「ああ、このあたりだな。」

「っ……!!」

遠くからこちらに2人の女性の声が迫ってくるのを感じた。

「(……どうする？ここは大人しく話し合つか……?)」

志貴は頭で考えた。

「(ここがどこかは、わからないし……、素直に従うか……)」

志貴は何があってもいいように警戒態勢で相手が現れるのを待った。

「織斑先生!、ここです!っ、え……？」

「どうした？山田先生？」

と山田先生のキョトンとした声に不審に思った千冬が聞くと、

「お、織斑先生、何も残ってません……。」

「何……？」

と山田先生の声に、警戒をしつつ確認した千冬。

「(とは、言ったものの、つい気配を消して隠れてしまった・・・トホホ・・・)」

と、志貴は内心で思った。

「(ここからでるにしても・・・どんな施設かも把握してないし、あと、この景色自体が見たことないよな・・・)」

と志貴は思った。

考えに没頭してたせいか、足元にあった小枝に気づかず踏みつけ、

「バキッ」

「あっ」

音を立ててしまい、

「誰だ？出て来い」

とばれてしまった。

「(ああ、やつちまった・・・)」

と志貴は木の影から姿を現した。

「貴様、どうやってここに進入した・・・？」

威圧しながら、志貴に質問した。

「どうやってって、言われても・・・気づいたらいたとしか言いようがないですよ」

と志貴は答えた。

「なんだ・・・？お前は・・・？」

そう、千冬は志貴の異様な格好に違和感を感じた。

全身が黒一色に統一された衣装、眼には包帯らしきものをつけた青年に。

「もう一度聞くんが、どうやってここに進入した？」

千冬が志貴聞くが、

「何度もいますけど、俺だって気づいたらここに飛ばされたんで

すよ・・・ハア・・・」

「飛ばされただと・・・？」

志貴の発言に千冬が食いつき、

「ええ……（よくよく、思い出すとそれ以外考えられないからなあ……）」

「まあ、飛ばされた理由はわかりませんがね……」

「まあ、いろいろ聞きたいでしょうが、まずこちらから質問です
志貴がいい、

「何だ」

千冬が答える。

「もう一度聞きますよ、こちらも、ここはどこですか？」

「何？、「IS学園」だぞ？ここは」

「だから、そのIS学園がなんなのかを教えてもらえませんか？」

「お前は、知らないのか……？」

「ええ、さつきも言ったとおり、俺はここに飛ばされたんです。別の世界からね……」

「別の世界だと……？」

「ええ……まあ」

「それより、この世界のことを教えてくれませんか？」

志貴が聞くと、

「ふむ……、信じがたいが今、ここにいる時点で信じるしかないか……」

どこか納得できてない顔でそう言った。

「わかった、この世界についてお教えよう、ただし、お前の世界についても聞かず。」

千冬がそういい、

「俺が説明できる範囲ではならしいですよ」「
と志貴が答えたのを聞いて

「よし、この世界だが」

千冬がこの世界についてを教えると、

「なるほど、その「IS」がスポーツとして運用され、まあ、代表候補生でしたっけ？を育成するための学園がここなんですね」

志貴は関心しながら、その話を聞いていた。

「さて、今度はお前の世界についてだが・・・、」
「だが？」

「その前に、名前を聞いていなかったな」

「ああ・・・」

「私は織斑千冬だ、ここで教員をやっている。で、こちらが山田先生で私の副担任になる人だ」

「は・・・、初めまして・・・！山田真耶です・・・！」

2人は名前をいい、志貴の番になり・・・、

「（ああ・・・「名前」なんて久しぶりだなあ・・・）」

頭の中でそう懐かしみ・・・

「俺は・・・俺の名前は・・・」

そう、自分の名前を思い出すように、

「名前は　　七夜、七夜志貴だ」

そう答えた。

世界を超え・・・(前編)(後書き)

さて、なんか、流れるにここで切ったけど、後編どうしよw考えて
ないっすww

世界を超え・・・（後編）修正というか変更（前書き）

さて、後編ですよ。前回は説明しすぎたのでなるべく説明回にならんよう気をつけます^^;

この小説での志貴は基本原作に沿いたいのですが、月姫のアルクトウルーENDを知らない上にほとんど二次設定とかで書いてるんでおかしな部分もあると思いますが、そこらへんを考慮して見てくださるとうれしいです。

感想でやはり、ナイフがISという設定は無茶苦茶では？とあり、感想読んで自分もやらかしたと思ったので修正と変更をしようと思います。ぶっちゃけ改稿の仕方しらんからやるんですがね・・・w

世界を超え……（後編）修正というか変更

「さて、七夜」

千冬が志貴に言う

「俺の世界についてですよね？」

と志貴は答えた。

「ああ」

千冬返答を聞くと、

「俺がわかる部分でしか話せませんのであしからず」

と前置きをして、

「まず、俺の世界ではここまで科学が進歩していません。さらに、戦争もまだ続いてた時代です。」

志貴は自分の世界について淡々と答える。

説明がすごくめんどくさいので省略

「まあ、俺の世界についてはこんな感じですかね」

「にわかには信じられんが、七夜を見る限り信じるしかないか……」

志貴の格好を見ながら千冬は答えた。

「しかし、会ってたから疑問に思っていたが、その目を覆っている包帯はなんだ？」

千冬が疑問に思っていたことを口にだすと。

「ああ、俺の「眼」は特殊なものでして、この包帯で抑えてるんですよ」

と志貴の答えに

「見えているのか？」

千冬がさらに聞く

「ええ、この包帯自体も特殊なんで見えてますよ、ちゃんと」

「外すことはできないのか？」

千冬が聞くと、

「まあ、大丈夫でしょうからいいでしょう」

と、いい包帯を外した志貴だったが、

「っ……？（おかしいぞ、線と点は見えるけど、頭痛がなぜかしない……？）」

疑問に思ったが包帯は外した。

「ほお……」

「綺麗な青色ですねえ……」

と2人とも別々の感想を述べていたが、当の本人の志貴は……

「（頭痛がしないのは好都合だけど、なぜだ……？）」
と疑問に思い考えていたが、

「（まあ、頭痛がしないなら気にすることはないか……）」
と1人で結論付け千冬たちに視線を戻した。

「で、一番確かめたいことがあるんですが……」
志貴が言うと、

「なんだ、言ってみる。」

千冬が答えた。

「俺って、どうなるんですかね？」

一番の問題点を暴露した。

「うむ、ISは持ってないんだろ？」

「ええ、というか、男は使えないじゃないですか……」
と当たり前前の会話をした。

「何か他についているものとかはないのか？」

千冬の質問に志貴は

「持っているのは、これぐらいですよ」

と懐から長年使っている「七夜」と彫られたナイフを出した。
ナイフを取り出して千冬に見せた。

「ふむ、確かに、それ以上は何も持っていないな。」

千冬が確認した。

他に確認することがなくなった千冬は志貴にこう告げた。

「あと、七夜」

「はい？」

「お前の処置が一応決まったぞ。」

「え？いつそんなこと決まったんですか？」

「山田先生に頼んでおいたのではな」

志貴はハツとなり、もう1人の女性を探すが・・・

「あれ？さつきまでいたのに・・・」

いないことに今更、気づき千冬の考えに驚いていた。

「IS学園には寮があるのでな、その寮長の部屋に間借りという名目で許可がでた。」

「え？寮長とか、無理ですよ？俺には？」

志貴は若干、嫌な予感がするなあ・・・と思いつながら千冬に聞いた。

「何、問題ないさ。入学式まで時間はたっぷりあるしな・・・」

千冬がニヤリとした顔を向けたとき、志貴は悟った・・・。

「（ああ・・・やっぱり俺ってこういう女性とよくあうなあ・・・

）」

と半ば諦めた思考を展開していた・・・。

志貴はとある一室で待機していた。

「はあ・・・、何か大変なことになってないか・・・？」

今更感がバリバリだが。そう思うしか納得できない志貴だった。

「何、問題ないさ、基本的な知識だけなら1週間で覚えれるさ。」

千冬のニヤついた顔で志貴のいる部屋に入ってきたので志貴は諦めた顔で

「俺はそんなに、頭はよくないのでお手柔らかにお願いしますよ・・・

。。。」

と答えた。

「ふっ・・・、覚悟しておけよ？」

千冬の言葉に志貴は引きつった笑顔で答えたのだった。

世界を超え・・・（後編）修正というか変更（後書き）

あれ・・・？志貴の包帯について後半何も書いてないぞ・・・？w
これ、やばくね？wあと千冬さんの言葉遣いってこんななんだっけか
な・・・？原作読み直したほうがいいかねえ・・・w

次回からようやく1巻の内容です！

うーん、支離滅裂って言われても仕方ないな！。

読者が読みやすいように頑張るか・・・。

てか、志貴の年齢っていくつだ・・・？20代なのはわかるが・・・
、下手したら千冬より年上だよね？wどうしよう・・・w

この小説にかんする告知のようなものですね（前書き）

これから書くことを配慮して見てくださるとうれしいです。

人によっては甘い考えに感じますが、そこは目を瞑って見逃してくだ
さい・・・・・・・・w；

この小説にかんする告知のようなものです

まず、

- 1 . 感想を読んで少しでも悪い点があると内容を変更します。下手すると内容がグチャグチャになる変更もするかもしれませんが。
- 2 . うp主はチキンハートなんでグサツつとくる言葉を言われると心が簡単にポキッってなります。
- 3 . 自己満足の塊でもありますので、読んで不愉快になる場合は今度、読まないことをお勧めします。
- 4 . オリジナル設定もだすかもしれませんが、あしからず。
- 5 . 褒めてくれると某吸血鬼みたく「最高にハイってやつだ！」状態になります。（褒めていいのよ？）（チラ
以上です。

これらを快く承諾していただける場合のみ、読んでもらえるとありがたいです。

IS学園（前編）（前書き）

はい、ようやく1巻の内容に突入します。志貴のISに関してですが、考えた結果、学園側からの支給される、という形を取ろうかと思いません。

さし当たって、ISの設定と名前を募集してみたないなーなんて・

・w

他人任せで申し訳ない・・・。

自分でも考えますが、思いつかない場合は募集という形をとると思います。

ぶっちゃけ、今回は志貴の紹介と志貴の立ち位置の紹介でおわるのかな・・・？

IS学園（前編）

「全員揃ってますねー。それじゃあショートホームルームSHRはじめますよー！」
黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服のサイズが合っていないのかだぼつとしていて、ますます本人が小さく見える。

また、かけている眼鏡も黒縁眼鏡もやはり大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ・・・というより背伸び間がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。

「それでは、みなさん一年間よろしくお願いしますね」
「・・・・・・・・・・」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
ちよつとうるたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。

なぜか。簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。
と、織斑一夏は思った。

その一方で志貴は準備をしていた。何の準備かと言われると千冬の助手みたいなものだ。

なぜ、そんなことになったのかと言うと・・・、

「七夜」

「はい、なんですか？織斑先生？」

千冬に話しかけられ答える志貴

ちなみに、志貴が寮で寮長をする話は無かったことになった。とい

うか、当たり前である。

しかも、その寮を担当する予定だったのが千冬だったので、志貴はなお驚いた。

「お前には。私の助手をしてもらう」

「へ？」

千冬にそう言われたのが入学式1週間前のことだった。

「いや、助手って・・・？」

「七夜、お前の年齢を考えても高校1年生は無理があるだろう？」

「確かに・・・」

そうそう、忘れていたがというか作者が年齢調べてなかったのが一番の原因である。

「というわけで、助手をしてもらう、ちなみに、決定事項だから拒否権はないとおもえ」

「え？さすがにそれは横暴じゃないですか？」

「知っているだろ？今のご時世を？」

「ええ・・・って、だからと言って納得はできませんよ!？」

志貴が反論すると、

「ほおう、私に反論とはいい度胸だな」

「さすがにいきなり助手で拒否権なしとか言われて反論しないほうがいいと思いますよ？」

千冬に言われ志貴がそう返すと、

「ふむ、なら寮長をやってもらうかわりに、助手の件は白紙にしてやって「すみません。助手をやらせてください。」「いいだろう」

千冬の言葉に志貴は折れた。というか、折れざるおえなかった。

志貴がなぜ、そこまで寮長に拒否反応を示すかはまた別の話であったり、なかったり。

という無茶苦茶なやり取りがあつたため、今、志貴は自分用に用意された個室で準備をしていた・・・。

「あれ・・・？でも、具体的に助手といっても何すればいいんだ？」
そう思う志貴だったが時既に遅かっり

「七夜、準備はできたか？」

「ええ一応は」

千冬に呼ばれたのでそう返事を返し、

「では、教室に行くぞ」

と言った千冬の後ろをついていくように志貴も歩き出した。

そうして歩くこと数分・・・

「さて、私が先に入って合図して呼ぶから呼ばれたらこい。」

「わかりました。」

そう言い、千冬が教室に入ると、

パアンツ！と音が響き、

「げえ、関羽！？」

と男の子の声がして、

パアンツ！とまた音が響いた。

「（今のが、千冬さんの言ってた弟か・・・。）」

と思った。

そして、千冬さんから「まだ、紹介してない人物がいるんでな、静

かにしろ！！」

と聞こえたので教室の扉に手をかけ、深呼吸して入っていった。

一方一夏はというと・・・、

「以上です。」

がたたつ。思わずずっとこける女子が数名いた。どんだけ期待してる

んだよ。無茶言っな。

「あ、あのー・・・。」

背後からかけられる声。涙声成分が二割増している。え？あれ？ダ

メでした？

パアン！いきなり頭を叩かれた。

「いつ　！？」

痛い、と言うより無脊椎反射より、あることが頭をよぎった。

この叩き方　威力といい、角度といい、速度といい、とある

人物　よく知っているとある人物と同じような感じなんです。

。。。
「。。。。」

おそろおそろ振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけっして過肉厚でじゃないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。

「げえ、関羽!？」

パンツ！また叩かれた。ちなみにすっげえ痛い。その音があまりに大きいから、見るよ女子が若干引いてる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーンの低めの声。俺にはすでにドラの効果音が聞こえてくるんですが、はて。

いやしかし、待て待て待て。なんで千冬姉がここにいるんだ？職業不詳で月に一、二回ほどしか家に帰ってこない実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

おお、俺の聞いたこともないやさしい声だ。閑雲長はどこへ？赤兎馬に跨って去ったのか、劉備の元へ？

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

さっきの涙声はどこえやら、副担任の山田真耶先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応える。あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にある操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才まで鍛えぬくことだ・逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

なんとという暴力宣言。間違いなくこれは俺の姉・織斑千冬。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャ　　!千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずつとファンでした!」

「私。お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですね！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「きゃいきゃい騒ぐ女子達を、千冬姉じゃかなりうつつとうしそうな顔で見る。」

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスだえ馬鹿者を集中させているのか？」

これが本当につつとうしがってるのが千冬姉だ。千冬姉。人気は買えないんだぜ？もうちよつとやさしくしようぜ。

と思った俺が甘かった。

「きゃあああああつ！お姉様もつと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして！」

女子達が元気でなによりです。

「で、挨拶も満足にできんのか。お前は」

と、千冬姉が言った。

「いや、千冬姉、俺は」

「パアンツ！本日三度目。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。」

「・・・はい、織斑先生」

と、このやりとりがまずかった。つまり、兄弟なのが教室中にバレた。

「え・・・？織斑くんって、あの千冬様の弟・・・？」

「それじゃあ、世界で唯一男で「IS」を使えるもの関係して・・・」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

最後のは放っておくとして・・・、

一夏がそう考えてると、

「まだ紹介してない人物がいるのでな、静かにしろ！！」

と叫んだ。

はて？どんな人物だ？

一夏を含めクラスの全員が頭に「？」マークを浮かべ千冬の言うことに耳を貸していた。

「入って来い」

ガララと教室の扉を開けて入ってきたのは・・・男だった。

「えーと、これから織斑先生の助手を担当する七夜志貴です。よろしくね」

と笑顔で答えると、クラスのほとんどの女子が顔を赤らめてうつむいた。

IS学園（前編）（後書き）

やばい、限界を感じたので一旦ここで切って前半にしたいと思います。

ぶっちゃけ、構成が浮かばないので無理やり切る感じですので、読みづらいたと思いますが、ご了承ください。

思いつきという名の復帰（前書き）

思いつきり頭がおかしいようなレベルで妄想が爆発したので書いて
みた^ p ^

・・・あと、失踪してたわけでは・・・ない・・・。

思いつきという名の復帰

殺人貴は視る

蒼と言われた力を

その持ち主を

世界を

「第666拘束機関解放 . . . !」

「次元干涉虚数方阵展開 . . . !」

「蒼の魔道書^{プレイブル}起動!」

「来いよ . . . 殺人貴!」

「 殺す」

蒼の魔道書の持ち主と蒼の眼を持つ2人が対峙する

「ヒヤッハー! いいねえ! まさかこんなサプライズがあるなんてなあッ!」

「ハザマ . . . ! てめえだけはぜってえ殺す!」

「いいねえ! その威勢をコナゴナにしてやんよ! カスが!」

ラグナとハザマ - - - -

「て・・・めえ・・・！なんだその力は・・・！」

「今から殺す相手に教える義理はない・・・」

ハザマに迫る殺人貴 - - - -

姫を殺し、世界から消えた殺人貴の新たな世界^{ステージ}

「蒼の魔道書と蒼の眼」

始まります - - - -

「っっていう夢をみたんだけど、志貴さん」

「疲れてるじゃないか？一夏？」

「そうなのかな・・・？」

夢才チでした。

思いつきという名の復帰（後書き）

はい、長い間更新放置しててすみませんでしたー！

実はいろいろあつて書く意欲がなくなっていました。

見てくださってる方々には申し訳ありませんでした……。

まあ、こんなの書くなら本編かけよって話ですよ……；・
、・・）

では、改めてここです。

亀更新に変更します（土下座

ゆるしてテへペろ

あ、石は投げないで！

IS学園（後編）（前書き）

お久しぶりです、皆さん。

油ドンです。

実は一時期情緒不安定になったりと私生活が荒れまして・・・w

ここ最近は普通ですが、B f 3をやっているのでほとんど放置状態でした・・・w

言い訳をするなら・・・すいませええええええええええん（土下座

久しぶりに書いた上に素人丸出しなので注意！

IS学園（後編）

そう、教室の扉を開けて入ってきたのは紛れもなく「男」だった。

成人男性だろうか？千冬姉と同じぐらいの年齢に見える。

「七夜には私の助手をしてもらおう。七夜にもそれなりの知識はあるので、基礎程度なら七夜にも聞くがいい」

千冬姉がそう言った。

すると、七夜さんが、

「呼び方は七夜でも志貴でも好きに呼んでいいよ」

しかし、ほとんどの女子が顔を赤らめていて話を聞いているかわからなかった。

かと言う俺こと、織斑一夏はうれしかったり、

「（よし……、志貴さんのお陰で1人じゃなくなった……！）」

どうでもよさそうでよくない内容だったり……、

それでは、1時間目に入るぞ……。

「あ……………」

参った。これはマズイ。ダメだ。キブ。

「・・・・・・・・・・」

1時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。

「その顔は授業についていけない顔だな・・・」

と、七夜さんが俺に近づきながら言ってきた。

「ええ・・・、あんなに専門用語並べられてもわかりませんよ・・・」

一夏は机に顔を突っ伏した状態で言った。

「はは・・・、仕方がないよ、本来「IS」に男は無縁に近いからね」

七夜さんが苦笑いしながら俺に言った。

「・・・ちよつと、いいか」

「「え？（ん？）」「」

突然、話しかけられた。七夜さんと話してたため、俺は間抜けな声で答え、七夜さんは誰だろう？って感じだった。

「・・・・・・・・・篇？」

「・・・・・・・・・・」

「ん？知り合いかい？一夏」

「あ……、はい小学校までの幼馴染です」

「なるほど」

「廊下でいいか？」

「え？」

いきなり箒にそう言われ志貴さんの方を見ると

「行つてきなよ、幼馴染との再会だろ？」

と、言われたので

「あ、はい」

そう答え箒と廊下に出た。

一夏と箒を見送った志貴はふう、とため息をついた。

「（しかし、ここまで視線を浴びるとはね……）」

そう、授業中は視線は気にならないが、休み時間になった途端に2、3年生もいるのか、かなりの数の女子が教室の周りにいた。

大半の女子は一夏の方に行ったが、それでも志貴に対する視線の数は変わらなかった。

周りを見渡すと、視線が合った女子は顔を赤らめたりして顔を逸らす子が多かった。

その中で1人の女子が志貴に話しかけた。

「ねえ〜ねえ〜、しっきー」

「ん？君は」

ゆっくりとした動作でこちらにやってくる女子の名前を思い出そうとする志貴だった。

「ん〜？私の名前は布仏本音だよ〜」

「本音ちゃんね」

「わ〜、本音ちゃんって言われた〜えへへ〜」

「で、その「しっきー」って？」

志貴の疑問に本音は

「志貴だからしっきーだよ」

「ああ・・・」

なんとも和むぐらいのほほ〜んとしてた。

志貴も笑いながら本音に答えてたため、その笑顔をみて周りの女子

がさらに顔を赤らめたのは言うまでもない。何名かは鼻血を出してニヤついていた始末である。

本音と喋っているうちに次の授業を告げるチャイムがなり志貴は教壇の近くに移動した。

すると一夏と篤が帰ってきて、何故か篤が一夏を睨み、一夏が考えごとをしている背後から千冬さんが出席簿で

パアンツ！

と、叩いた

「とつとと席に着け、織斑」

「……………ご指導ありがとうございます、織斑先生」

一夏が頭を押さえながら席に戻っていったのを苦笑いしながら見た志貴だった

授業が始まり、先生の山田先生の話当真剣に聞いている女子たちの中で一夏の動きがおかしいのに、志貴が気づいた。

「（もしかして……………授業の内容がわかってないな……………）」

内心でため息を吐いて手助けしようか考えてる間に、山田先生が

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

と、一夏の状態に気づいた山田先生が一夏に言った。

「あ、えつと……」

一夏は教科書に一度目を落として、

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なんせ私は先生ですから」

と山田先生が胸を張って言った。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

一夏の言葉に答える山田先生

「ほとんど全部わかりません」

と一夏が言つと

「え……。全部、ですか……?」

予想外の回答に困つた顔で答える山田先生

「え。えつと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

と拳手を促す山田先生

しかし……、誰も手をだけなかった

「……織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「パンツ！」

「必読とかいてあっただろうが馬鹿者」

「あとで再発行してやるから1週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、1週間であの厚さはちょっと……」

千冬さんが言うと、一夏は無理ですよ……と言いたげに答えた

「やれと言っている」

「……はい、やります」

結局、千冬さんに睨まれて諦めたのかそう答えた

そう言った後、千冬さんがさらにESについて喋っていたが、その後、一夏と放課後に勉強しましょう、という話になった途端に自分の世界にトリップしたり、教壇に戻る際にこけたりと不安になる一夏と志貴だった。

チャイムがなり、授業が終了すると千冬さんに、「次の授業の資料を運ぶのを手伝ってくれ」と言われたので一緒に教室をでる。

「大変なもんですね、教師ってものは……」

志貴がそうつぶやくと

「なに、これぐらいは大したこともないさ」

と千冬に返された。

「そんなものですかね」

「そんなものだよ」

そうたわいのない話をしながら職員室まで資料などを取りにいった。そうして教室に戻り、千冬さんが教壇に立ち、授業を始めようとして。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と、思いだしたようにクラスへ向けて言った。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での格クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変化しないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「（一夏は意味がわかってない顔をしているなあ・・・）」

と志貴は教室を見渡しながら思った。

志貴がそう考えていたら、クラスの女子が

「はい、織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

クラスの女子たちが次々に一夏の名前を挙げていく

「では、候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

やっと状況が飲み込めたのか、声を上げて立ち上がっていた

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな

」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも

」

一夏が反論しようとしていると、突然甲高い声がそれを遮った。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

と、大声でいい立ち上がった金髪の女子だった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表者だんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

いきなり、男を批判する文句だった。

志貴はこういう子なのかなあ〜という感じに捉えて話に耳を貸していた。

「実力から行けばわたくしがクラス代表者になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練にしているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

おいおい、イギリスだって島国だろ、日本と大して変わらないだろと、一夏は思った。

ふと、志貴さんはどう思っているのかと思い、志貴の方に視線を向けてみると、

呆れたようなため息を吐き、苦笑いしていた……。

どうやら志貴さんもこういう手の女の子にあったことあるんだろうか？

と、考えに没頭していて気が緩んだのか

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

カチンときた。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

あ

「なっ……!?!?」

つい、言ってしまった。こっつ、つるつと口が滑ってしまった。

おそろおそろ後ろを向くと、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリアが顔を真っ赤にして怒りを示していた。

うわあ……やってしまった……。

「あっ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの!?!?」

あー、もう、こうなったら仕方ない。覆水盆に葉えら図。転がりだした石はとまらない。

「決闘ですわ!」

パンツと机を叩くセシリア。ついでに手袋も投げてきたりするんだろつか。手袋してないけど。っていつかあの決闘申し込みってイタリアだっけ?

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
……いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？なにせちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですね！」

流れとはいえ、勝負するはめになってしまった。しかし、男が本気で女と力比べをするわけにはいかないし、どうしたものかね。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いですか？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

と、そこまで言っただけでクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

と、クラスの女子が言う中で、1人苦笑いしてる人物がいた。

「（あー、生身でもそれなりに戦えたんだよなあ……俺って……）」

空中に浮くことを禁止した近接戦闘ではあったが志貴はIS相手に生身で善戦し驚かせたのだった。もちろん相手は山田先生だが
と知っている、千冬が

「だが、生身でIS相手に善戦するやつもいるぞ」

千冬の発言に教室が静かになった。1人を除いてだが……。

チラッとこちらを見た後に、

「七夜は山田先生に制限付きではあるが善戦したぞ」

「……え？えええー……!!」「……」

志貴と山田先生の戦いについてはまたの話とされた

教室の全員がハモって叫んだ。かなり他の教室に迷惑な音量である。

「は、はは……」

もはや志貴からしたら苦笑いするしかない志貴だった。

「で？織斑はハンデはどうするのだ」

「いや、やっぱりなしにする」

「だ、そうだが？オルコット」

「え。ええ・・・、かまいませんわ」

「さて、ほかに意見がないのならまとめさせてもらうぞ。勝負は一週間後の月曜。放課後に第3アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ準備をしておくように。それでは授業を始める」

「（勢いとはいえ、一週間もあれば基礎ぐらいはマスターできるはずだ。そんなに難しいもんでもないだろ。）」

しかし、なんとなくかなくてもクラス代表になってしまいうから気持ちとしては微妙なところな一夏だった。

なにしても覆水盆に返らず。一度吐いたツバは飲み込めない。

「（よし、真面目に授業を聞こう）」

そう考えをまとめ、授業に集中する一夏だった。

IS学園（後編）（後書き）

ぶっちゃけ、土下座がない（キリッ

後は他の投稿者の作品を毎日漁ってたぐいです。

もしくはBF3

ただ、亀更新なのでいつ上がるかはわかりません！

ご了承お願いいたします。

まあ、復帰しましたので今後もヨロシクです。

学園生活（前書き）

かなり長文になっております。なんかキリのいいところでメようとしたらすっげえながくなった。反省はしてないが、後悔はしている。って、なわけでもござ。

学園生活

「うづう……」

放課後、俺は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん……、なんでこんなにややこしいんだ……?」

とにかく専門語の羅列なのだ。辞書でもなければやっていけない。だが、ISに辞書などは存在しないので、

つまり、俺は今日一日でほとんどまったくなにもやっていけなかった。

ちなみに、放課後とはいえまったく状況は変わっていない。

また女子が他学年・他クラスから押しかけ、きゃいきゃい小声で話し合っている。

(うづく……。勘弁してくれ……)

昼休みも、それはもう地獄だった。俺が学食に移動するとゾロゾロとかなりの数が後をついてきたのだ。

(他の大半の女子は志貴のほうに群がっていった)

大名行列じゃないっての。しかも学食ではまた、モーゼの海割りで、俺はちよっとしたガリバー状態だった。

初めて日本にきた珍動物かよ。そういえば昔ウーパールーパーって流行ったらしいが、どういう生き物かは名前からしてまったく想像できない。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

どうでもいいけど、この先生身長低く感じるな、平均だろうけど。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました。」

そう言っつて部屋番号の書かれた紙とキーをよこす、山田先生

「あれ？志貴さんっつてどうなるんですか？千冬ね「織斑先生だ」お、織斑先生」

同じ男として気になった一夏が千冬に質問した。

「やつはお前がISを使えるとわかる1ヶ月以上前からこの学園にいたので、部屋はもう決まっている。」

と千冬に返されたが、一夏は疑問に思った。

(あれ・・・？なんか、おかしくないか・・・？)

そう、思った一夏はさらに質問を投げかけた。

「え？IS学園に志貴さんが1ヶ月以上前からいるっておかしくないですか？普通は」

一夏の疑問はもつともだ、本来ならIS学園に男がいるのはおかしいのだ。

世間からしてもISは女性しか使えないのがあたりまえである。

一夏という例外を除いては、本来ありえないことでもあるからだ。

一夏の質問に対して千冬は少し考える素振りをみせた後、こう答えた。

「やつはIS学園で倒れていたところを私と山田先生で保護した。」

と、言われ、予想もしなかったのか一夏の顔は驚きの一色だった。

「え？倒れてた？え、織斑s「この話はこれでおしまいだ。」は．．はい」

一夏の追及を無理やり切り、話を進めた。

「聞きたいのなら本人にでも聞くんだな。まあ、あいつ自身も倒れてた原因がわかってないだろうがな」

と付け加えられたので、返す言葉もなく詰まった一夏に千冬が言った。

「さて、話が逸れたが、寮の使用方法について説明するぞ、山田先生頼んだ。」

「は、はい。では寮について説明しますね。」

と、千冬に続いて山田先生が説明に入った。

「え？でも俺って一週間ほど自宅通学だったって聞いたんですが」

一夏が聞いた話と違うなあ、と思い聞くと、

「そうなんですけど、事情が事情だけにそうもいかなかったようなので、一時的な措置として寮の部屋割りを無理やり変更したらいいんですよ」

と山田先生が教えてくれた。

「そのあたりのこと政府から聞きましたか？織斑君？」

と耳打ちで言ってきた最後のほうだけだが。

ちなみに、政府っていうのはもちろん日本政府。何せ、今まで前例のない『男のIS操縦者』だから、

国としても保護と監視の両方をつけたいようだ。

ちなみに、あのニュースが流れてからマスコミやら各国大使やら拳句の果てには遺伝子工学者が「体を調べさせてくれ」なんて言ってきた。きやがった。

誰が好き好んで体を解剖してくれってうなずくか、馬鹿。

「そういうわけで、政府特命もあって寮に入れるのを最優先したみたいです。1ヶ月もすれば個室も用意できますから、しばらく相部屋で勘弁してください。」

と、山田先生に言われた。

「えっと、志貴さんと相部屋ですか？」

と、もう1人の男である志貴と相部屋であろうと思つて一夏は質問した。

「いえ、実は志貴さんは一応教員なので生徒とは別の部屋なんです。それと、男性がISを使えるなんて誰も予想はできなかったので、相部屋になつたんですよ。」

「はあ、わかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日は帰っていいですか？」

「あ、いえ荷物なら」

「私が手配しておいた。ありがたく思え」

ああ、この声絶対千冬姉だよ。すでに、俺には無条件でダンスベイダーの曲が流れていた。ちなみに、こう一曲流れることがあるが、そっちはターミネーターの曲だ。

「ど、どうもありがとございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろ」

「すげえ大雑把。確かにその通りだけど、人間には日々の潤いも大事だと思うんです姉さん。」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに、各部屋にシャワーがりあますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間帯は違いますけど……、えっと織斑君は使えません。」

「え、なんでですか？」

俺、大浴場って大好きなのに。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「そうだった。ここ俺以外……、あ、志貴さんも含めて二人しかいなかった。」

「おつ、織斑君、女子とお風呂に入りたいんですか?! だつ、駄目ですよ!」

「い、いや、入りたくないです」

「どんな目にあうかわからない。というか、普通にだめだろ。倫理的に。」

「ええっ？女の子に興味がないんですか！そ、それはそれで問題なような・・・」

「どうしよう、この人結構人の話聞いてない。」

「きゃあきゃあ騒ぐ山田先生の言葉が伝言ゲーム的に伝わったか早くも廊下では俗に言う『婦女子談義』とやらが花咲いていた。」

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら・・・？」

「それはそれで・・・いいわね」

「志貴さん×織斑くんね！、受けが織斑くんで攻めが志貴さんね！」

「中学時代の交友関係洗って！すぐね！明後日までには裏取っとけ！」

何の話だ、なんの。おい、あと三人目の女子、どういうことだ。説明しろ。あれか？そういうあれ？志貴さんと俺をそういう目で見るのか？

「えっと、それじゃあ、私達はこれから会議があるので、これで。織斑君、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃ駄目ですよ。」

「校舎から50mしかない距離で、どうやって道草くえというのかこの人は。」

「そりゃあ確かに各種部活動、ISアリーナ、IS整備室、IS開発室などいろんな設備・施設があるIS学園だが、今のところは関係

ない。

いずれ見て回らなければいけないだろうが、今日のところはとにかく休みたかった。と、言うより女子の視線から解放されたかった。

「ふー……」

千冬姉と山田先生が教室から出て行くのを見送って、俺はため息混じりに立ち上がった。

また教室内外であれこれと騒がしい声が聞こえるが、今日はもう無視を決め込んで部屋に行こう。

ここよりマシだ。たぶん……。

「えーっと、ここか。1025室だな」

俺は部屋番号を確認して、ドアに鍵を差し込む。あれ？開いてるじゃない。

ガチャ。

部屋に入ると、まず目に入ったのは大き目のベッド。それが二つならんでいる。

そこいらのビジネスホテルより遥かにいい代物なのは間違いない。こう、見ているだけでふわふわ感が醸し出されている。

これが格の違いってやつだろうか。国立万歳。

荷物をとりあえず床にやって、俺は早速ベッドに飛び込む。・・・
おお、なんとというモフモフ感。これは間違いなく高いベッド&羽毛
布団。

「誰かいるのか？」

突然、奥の方から声が聞こえた。ドア越しなんだろう、声に独特の
曇りがある。

そういえば、全室にシャワーがあるっていつてたっけ？ ん？

「ああ、同室になったものか。これから一年よろしく頼むぞ」

何か、すごく、嫌な予感が、こっ、足元から、ぞわぞわと。

「こんな格好ですまない、シャワーを使っているな。私の篠ノ之

」

「 簞」

そう、今しがた、シャワー室を使っていた簞がタオル一枚の姿で出
てきた。

というか、だいぶ成長したんだなあ・・・、っと考えてしまった俺
は悪くないはず。

だって、タオル一枚で隠すには面積がギリギリな胸とスラリとした
かつ、無駄のない女性的な体のラインをみてそう考えないやつは男
ではない。そう言い切れる。

以上、1秒での思考終了。

「い……いちか……？」

「お、おう……」

俺をみた箒が顔を真っ赤にした。そりゃそうなるわな、女性だと思つて出てきたら異性だなんて。俺でも動揺するよ。

「っ……！見るな……！」

「わ……悪い！」

そう言つて顔を横に背ける。チラツと横目で箒の方を見ると腕で体を抱くように隠そうとしているが、逆にそれで強調されている胸があつた。箒さんや隠せてないぞ。

(な……なぜ……一夏が私の部屋にい、いるのだ……?!)

テンパつてまともな思考が働いてない箒が一夏に聞いた。

「な、な、なぜ一夏がこの部屋にいる……？」

「いや、俺もこの部屋なんだが……」

そこからの展開は早かつた。超速だつた。さすがは全剣道優勝者。箒は即座に壁にかけてた木刀を取ると、くるりと一回転して上段打突の構え。そこから基本に忠実な低腰短歩で一気に間合いを詰めて来る。　　つて死ぬ?!

俺は一目散にドアへ走った。

ボタン！

ドアの向こうへと間一髪の脱出。背中であらゆる反動が遅れてジーンとやってくた。

「助かつ
」

ズドン！と顔のすぐ横を木刀が突き抜けた。

おい、このドア木製だぞ。どうして木刀で貫通する技術があるんだ。間違いなく殺しにきてるだろ？！

「お、落ち着け！、殺すきか！」

ズズツ・・・と木刀の先が引いた。よかった、助かった・・・。

「え？なにになに？」

「あ、織斑君だ〜」

「あ、織斑君の部屋ってそこなんだー。」

と、騒ぎを聞きつけたのか女子が人目を気にしないかなりラフな格好で出てきた。

その、なんとういうか、俺も年頃の男子でして・・・ええ・・・目のやり場に困るんだよ！一部の子なんて羽織っただけのブラウスだけの格好だぜ、うん、どうしょ。

「箒さん！お願いです！部屋に入れてください！かなり大変です！主に俺が！」

と、部屋の中の箒に頼み込む。届けこの思い。

「……………」

返ってきたのは沈黙だった。時間からして二、三分たったぐらいにドアが開いた。俺からすれば、この空間での二、三分は一時間に匹敵したかもしれない……。

「はいれ……………」

「お、おう」

ドアを開けた箒は剣道着に着替えていた。手早く着替えるのがそれしかなかったのだろう、帯の締め方が緩い。

むすつとしたままで、まだ濡れた髪を手早くポニーテールに纏める箒。

「お前が、私の同居人か？」

「お、おう。そうらしいぞ」

また睨まれた。こっぴど視線だけで竹とかをスパーンって。

「自分からいいたしたのか？」

「え？」

「同居人になると」

「そんなばかな」

と、言った瞬間、木刀で斬られかけた。

「あ、あぶねえ」

ギリギリで木刀をキャッチして難を逃れた。でも、手は痛い。衝撃は殺せないからな。

「馬鹿……馬鹿だと、そうか……」

ああ、顔がすつげえ怖い。かなり怖い。しかも、木刀をとめられた状態で押し切ろうとしてきてるし。

木刀とはいえもろに食らえば、気絶するだろう。下手すると頭蓋骨が陥没するんじゃないかと目の前の幼なじみの顔を見てると思う。で、さらに体重をかけてきてるので、俺が箒に押し倒されてるような状態ができあがるわけで、

「わあー、篠ノ之さん大胆ー」

「抜け駆けしちゃだめだよー」

「織斑君が受けなのね！やっぱり私の目に狂いはなかった！」

という状況ができあがった。鍵をかけ忘れたドアから女子達が覗い

ていた。あと、三人目、後で覚えてるよ。

「な、なな・・・?!」

ぱつと俺から飛びのく筈。よかった命が助かった。

「えー、もうおわりー?」

「いいところだったのにー」

ほう、今時の女子は殺害未遂現場をみてそんなことを言うのか。

「・・・!!」

無言で女子を追い出し、念入りに鍵をしめた。筈がこちらに振り返った。

「一夏・・・」

「はい」

「今後の状況について話すぞ。」

「お、おう」

「まず、部屋での線引きみたいなものをだな・・・。」

「あ、ああ」

「ま、まず、シャワーの使用時間だが私が七時から八時、一夏が八

時から九時だ」

「え、俺は早いほうがいいたんが・・・」

「わ、私に部活後のままでいるというのか・・・!」

「部活？あ、剣道部か？」

「そ、そつだ」

「え？部室棟ってシャワーなかったっけ？」

「私は、部屋のではないと落ち着かんのだ!」

む、そう言われると仕方がないな・・・。誰にでも落ち着く場所つてのがあるし。

「あれ？そういえば、個室ってトイレなかったよな？」

「ああ、ああ、各階の両端に二カ所あるだけだな」

「あれ？男子の俺はどうすればいいんだ？」

「し、しらん！先生にでも聞け!」

マジかよ、結構一大事だぞ。

「最悪の場合は女子トイレに入るしか・・・」

と、言いかけたときに殺気がして飛び退いたら箒が木刀を再び手に

していました。あれ？やばくね？

「お、お前は何を言っている？！会わないうちにそんな変体思考になつたのか・・・?!」

「はあ！なんでそうなるんだよ！」

「当たり前だろう！女子のトイレに入るなど、変態以外の何者でもないだろうが！ええい！成敗してくれる！」

「されてたまるか！」

とりあえず、部屋の隅に置いてあった竹刀を見つける。箒の私物だろうか、ポストンバツクにささっている。

（ちゃんと袋にいれてるよ。そういうのうるさかっただろ）

木刀と打ち合えば折れるだろうが、箒が落ち着くまで持てばいい。そう思つて竹刀を引き抜いた。

（ん？なんか引つかかってスムーズに抜けないな）

ずぼぼっ

「あああああっ！」

ようやく抜けた竹刀を中段に構える。

「？」

しかし、向こう側の箒は金魚のごとく口をパクパク開閉させるだけだった。というか、無茶苦茶狼狽している。

「ん？これなんだ・・・？」

竹刀についてた物を取ってみた。三角形を二つ並べた形のこれは

「か、かえせ！」

超速の強奪だった。木刀はベッドにぼうり捨ててある。

さらにいくつかの竹刀に絡まっていたものも取って、両手で覆い隠した。

「・・・・・・・・・・」

あれ？なんであんなに顔真っ赤なんだ・・・？それとなぜ睨む。

あ

ふと、頭の中で繋がり、さっきさわっていたものが何かわかった。わかってしまった。

「箒」

「な、なんだ・・・」

両手で物を守りに入っているのか、攻撃的態度から守りにはいつて警戒状態になったようだ。

ちらつと隙間を見ると白に薄ピンク、薄い青の生地が見える。ああ、と確信に変わる。

「ブラジャー、つけるようになったんだな。」

「~~~~~!!!!!!」

ドゴスツ！と俺の頭に爆音が響いた。というか、箒よ、どつやってそんな音をだした。

「ん？何かすごい音がしなかったか？」

志貴がふと気になって耳を澄ませた。

「……………」

特に変わった音は聞こえなかった。

「なんだ、気のせいか」

「さて、いい時間だし俺も寝るかなあ」

と夜も遅いので志貴がベッドにはいり寝た。

学園生活（後書き）

さて、今年も残すところあとちょっとですね。

俺は年明けは家でダラダラしてますw

皆さん、よいお年をお過ごしください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5671u/>

IS 夢の果ての殺人貴

2011年12月30日03時52分発行